慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サヴォナローラとメディチ家 : 失脚原因論序説
Sub Title	
Author	増田, 重光(Masuda, Shigemitsu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.1 (1948. 1) ,p.75- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ルネサンス文化
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サヴォナローラとメディチ家

——失脚原因論序説——

增田重光

(一)

ハースト、ランケ等が言つたやうに(1)、結局政治界への進出がサヴォナローラの失脚を惹起せしめた根本的な原因であつたとするならば、彼と政治との關係を考へる事は少くとも彼の失脚原因の一考察となる次第であり、從つて又、既に幾人かの有能なサヴォナローラ研究家達によつて種々な立場から立論された彼の失脚原因論にも直接關係する問題でなければならないであらう。然し目下の我々が、この限られた紙面に於いて、直接考察の對象にしようとするのは、かゝる廣範圍に亘る彼の失脚原因論の全面的探究乃至批判ではなく、僅かにその序說的意味に於いて、彼と當時の政治界との關係のうち、特にこの第一段階を形成するものと考へられるメディチ家との關係、卽ち彼のロレンツォ及びその子ピエロに對する態度乃至關係の考察に限定されなければならない。而もその際これと相含めて考察さるべきメディチ家の對サヴォナローラ態度、就中ロレンツォのこれに就いては、不完全ながら既に考察する處があつたのであ

り(2)、從つてこの小論考に於いては、サヴォナローラのとつた對メディチ家態度乃至はその變遷、換言すれば當時のフィレンツェ政治當局者に對してサヴォナローラが、事實上如何なる態度を取りつゝあつたかの問題に、專ら考察の重點が向けられるであらう。

尙ほこの際サヴォナローラ運動の盛衰に關聯して、彼の運動とフィレンツェ庶民階級との結び付き、具體的に言へば彼の運動の基調に見られた庶民的性格の問題(3)、そして又廣くはルネサンスの特性とも稱される貴族性の問題(3)、宗教性(4)の問題に就いても、若干の考察が並行的に爲さるべきではあるが、それらの問題はこの序說のうちに取扱はれるには餘りに重大な問題でもあり、それぞれ別箇に論究さるべきが至當であると思ふので、こゝでは一應割愛し他の機會に改めて考へて見たいと思ふ。

註 (1) John Fletcher Hurst, Short History of the Christian Church, 1902. pp. 209-210; L. v. Ranke, Sämmt. Werke, Historisch.biographische Studien, Vorrede.

(2) 拙稿『ルネサンス觀と大ロレンツォ觀』『日伊文化研究』第六號、參照。

(3) 簡單なものとしては Sidney Dark, The Story of the Renaissance, Chapter VI. Social Couditions. を參照、尙ほ邦文ものとしては羽仁五郎氏『ミケルアンジェロ』(岩波新書)がこの點に兎に角觸れて居る。

(4) Vgl. E. Walser, Gessammelte Studien zur Geschichte der Ren., S. 288 ff. 拙稿『イタリア・ルネサンスとサヴォナローラの運動』(『歷史學研究』)第十卷第十二號。

(二)

さてサヴォナローラの對メディチ家態度を考察する場合、時期的にはそれも又ロレンツォの生前及び死後の二つに分けて見る事が便宜であるが、その前期は一四八二年のサヴォナローラのフィレンツェ入來に始まり、一四九二年のロレンツォの死去に至る略々十年間であり、後期はそれ以後一四九四年のフランス王シャール八世のイタリア侵入に因るメ

ディチ家支配の終焉迄の二年間であるが、前期に於いても、事實上サヴォナローラ＝ロレンツォ兩者間に直接の交渉が始まつたのは、一四九〇年以後サヴォナローラの名聲が漸く高まつて後の事であり、これ以前に見られた彼の言動は無名の一修道僧としての宗教的のそれに過ぎず、從つてそれは政治界に時めく大ロレンツォにとつては、意に介することすら不名譽と考へられた程度の非政治的色彩のものにすぎなかつた(1)。即ち一四八二年ボローニァからフィレンツェのサン・マルコに派遣された彼は、一四八三年招かれてサン・ロレンツォに赴き、四旬齋の説教師としてフィレンツェに於ける第一聲を發した。然しその反響は皆無に近かつたと言はれる(1)。其の後暫くの間彼は説教壇を退き、サン・マルコのコンヴェントに於ける修道士の指導に當つて居たのであるが、この間に於いても彼の宗教的熱情は少しも衰へず、やがてヴィジョンを見始め、黙示線の中に神の懲罰の象徴を認め、豫言者としての自覺に目覺めて行つた。そして彼が説教師として獲得した最初の成功はサン・ジェミニュアーノ(一四八四―一四八五年)に於いてであつたが、彼の辯士としての力量が最もよく發揮されたのは、更にこの翌年プレジアでの説教の際であつたと言はれる(2)。彼は來るべき神の懲罰を説き、或ひは又神の慈悲を保證して聽衆に深い感動を與へたのであつた(3)。

次いでレッジォで開かれたドミニクス派の討論會に於いて、彼はこの豐かな神學知識と明敏さとを廣く知られる機會を得たのであるが、その際特に彼の學識に傾倒したピコ・デッラ・ミランドラは、ロレンツォを説いてサヴォナローラをフィレンツェに招聘せしめたと言はれる(4)。かくて今や著名な説教師として彼はフィレンツェに赴き、一四九〇年八月一日、サン・マルコに於いて説教を行ひ、又同時に自己の著作集を刊行して、その解説と故意の誤譯の論駁に努めた。そして翌一四九一年六月には招かれてサンタ・マリア・デル・フィオーレに至り、シニョーリアの面前で臆する處なく所信を述べ、諸名士をして顏色なからしめたのであつた。かくて次第にその全貌を現はして來たサヴォナローラの無遠慮な言動を氣に病んだロレンツォが、人を遣はして己れに一層の敬意を表すべき旨を彼に忠告せしむるや、彼は敢然としてかゝる勸告を退け、却つてロレンツォ、法王インノチェント、及ナポリ王の近き將來に於ける死を豫言し

たと傳へられる(5)のは正にこの時の事であつた。而も同年七月には、彼がメディチ家と緣故の深いサン・マルコのプリオールに選ばれて居るのは、彼とロレンツォとの關係が少くとも正常以上の好狀態にあつた事の證左と考へられてよいであらう(6)。從つて我々は、新プリオール・サヴォナローラのロレンツォに對する態度が、慣例を破つた反抗的なものであつたと强調する一部學者の主張(7)には直ちに從ふ事は出來ぬのであり、寧ろかゝる强烈な反抗的態度を疑問視するシュニッツァーの見解(8)を妥當と考へるのである。然しさればと言つて、ロレンツォがサヴォナローラの言動に對して全く無關心の態度を取りつゞけて居たと卽斷する事も亦正しくないであらう。フィレンツェの事實上の統治者であつたロレンツォが顧慮したのは、サヴォナローラの宗教的信念に基く言動そのものではなく、それの及ぼす政治的な影響であつた。先きに考察した如く、ロレンツォの對サヴォナローラ態度の不徹底さ(9)の原因としては、彼の心底に尙ほ流れつゞけて居た宗教性と共に、更に彼の政治家としての右の如き顧慮があつたのであり、それがある時には安堵の形に於いて、又ある時には焦燥の形に於いて、彼の一見不徹底とも見える對策となつて現はれたのであると考ふべきであらう。彼がやがて、アウグスティヌス派のマリアーノを使嗾し、その說教を通して間接にサヴォナローラの勢力制壓を計り、而もその不成功を坐視するのみであつた如きは(10)、その一つの現はれでなければならない。

そしてかの劇的な臨終に際しての彼とサヴォナローラとの間に交はされたいくつかの對話こそは、かゝる兩者間の關係を端的に表はした最後のものであつたと言はるべきであらう。この事件に就いては、古來種々の異說が唱へられて來たが、アームストロング(11)、シュニッツァー(12)、ワルザー(13)、クライトン(14)、そして又ランケ(15)等によつて究明され、確立された眞相は次の如くである。

一四九二年四月、病床に死期の迫れるを知つたロレンツォは、その Seelenarzt であるグィド (Prior der Kamaldulenser im Eugelkloster zu Florenz) を枕頭に招き靜かに懺悔を行ひ、聖路銀(Heilige Wegzehrung) の受領を濟ませた。次いで後嗣ピエロ、侍醫、ポリツィアン、友人ピコ・デッラ・ミランドラ等を引見したが、グィドの退出と入れ違

ひにサヴォナローラが入つて來た。彼は先づ信仰を確保しつゞくべきやうロレンツォに忠告し、その宣誓を得た。更にサヴォナローラの爲した改悛の勸告に對しては、ロレンツォはたゞに之に從つたばかりでなく、『若しそれが神の意志であるならば、死より好ましいものはない』と迄その心情を吐露した。そしてやがて立去らんとしたサヴォナローラに對して、彼は祝福を請うたが、之れを授けられて後靜かに息を引き取つたのであつた。

以上に見られるロレンツォの、そして又之れに對するサヴォナローラの態度は、兩者の關係を考へる我々にとつては極めて示唆的である。

ロレンツォが明敏な政治家として、當時の宗教界の墮落を憂愁の思ひを以て眺めて居たといふ事は、種々の事實から明らかな處である(16)。さればこそ彼は、サヴォナローラの言動を無垢な聖僧のそれとしては高く評價して居たのであつた。而も他方老練な現實的政治家としての彼は、祖父コシモの金言『一國は主の祈りによつては治められない』の堅固な信奉者でもあつた(17)。終始一貫無垢なリホーマーとして行動したサヴォナローラ、心中に宗教性を藏しつゝも尙又現實の政治家として之れに對處しなければならなかつたロレンツォ、兩者の關係を解明する鍵は正にこの點にあるのであり、かゝる確乎たる信仰こそがサヴォナローラの不動の言動の源泉となり、かゝる心中のディレンマこそがロレンツォの態度に見られた不徹底性を特徴づける究極の要因ともなつたのであつた。さればこそ、この兩者の關係は少くとも『公然たる不和の狀態には立至つて居なかつた(18)』と言ふ事が出來るのであらう。

註 (1) Vgl. J. Schnitzer, Savonarola, I. S. 78-9; M. Creighton, A History of the Papacy from the Great Schism to the Sack of Rome. 1923, vol. IV. p. 170.

(2) Schnitzer, I. S. 82-3.

(3) Ebenda, S. 79-81.

(4) Ebenda, S. 91.

(5) アームストロングは、サヴォナローラの取つたと傳へられるかゝる强烈な反抗的態度を、むしろ異例的なものと解釋

して居る。E. Armstrong, Savonarola. p. 146 (The Cambridge Modern History. Cheap Edition. Vol. I).

(6) Ebenda, pp. 146–7.

(7) Vgl. Reumont, Lorenzo dé Medici. II. S. 365 ff.; H. Grimm, Leben Michelangelos. 1922, S. 109.

(8) Vgl. Schnitzer, a. a.O., I. S. 109.

(9) 拙稿『ルネサンス觀と大ロレンツォ觀』參照。

(10) Vgl. Schnitzer, a. a. O., I. S. 110–1.

(11) Armstrong, Cambridge. I. pp. 146–7.

(12) Schnitzer, a. a. O., I. S. 144 ff.

(13) Walser, a. a. O., S. 279.

(14) Creighton, op. cit., p. 340.

(15) Ranke, Männer., II. S. 10.

(16) この事は、彼の發した數多い書簡の中に認られるのであるが、その子 Cardinal Giovanni 宛に發せられた一四九二年三月のそれに於いて特に然りである。(Lives of the Early Medici as told in their Correspondence, Translated and Edited by Janet Rose. 1911. p. 332 ff.)

(17) Armstrong, Cambridge. pp. 165–6.

(18) Ranke, Männer., II. S. 10.

(三)

それならば、ロレンツォの死後、サヴォナローラとメディチ家との關係は如何なる變貌を呈したのであらうか。そしてその原因は奈邊に求められるべきであらうか。

ロレンツォの死後、サヴォナローラの言動が俄かに硬化し、强烈の度を加へたこと、そして又從來のメディチ家歸依者の多數がピエロを去り彼の下に集まり、その絶對的支持者となつたといふ事は多くの史家の一致に認める處である

が(1)、この事は又直ちに彼とメディチ家との關係の變化・乖離を示すものでもなければならない。而もかゝる事態の變化の原因としては、ピエロ・デ・メディチの不肖と暴逆(2)、新らたに法王位に就いたアレッサンドロ六世の醜惡なる性格(2)等に對する人心の離叛が普通にあげられて居るのであるが、サヴォナローラの言動がこの頃には、たゞにヴィジョンと豫言者の自覺とによつて狂熱化したばかりでなく、遂にはその宗教的理想の實現の爲めに、果斷な實際的行動をもとるに至つて居たといふ事は特に注意さるべきであらう。そしてそれが先づ第一に認められたのは、サン・マルコのロンバルド・コングレガツィオン(Lombardische Kongregation)からの分離運動(3)に於いてであつたが、これに對しては、種々の反對があつたにも拘らず、ピエロを首めシニョーリア等メディチ家の政治當局者達は何れも援助を惜まなかつた(4)。そして法王も亦積極的にはこれに反對しえず、結局默認の態度を取つた(5)。ロレンツォの死後に於けるサヴォナローラに對して、メディチ家を首め、一般人士の抱いた傾倒の念が如何なる程度のものであつたかは、この運動のかゝる經過からも理解出來るのであるが、而もこゝに我々の見逃がしてはならないのは、彼の言動が今や漸く實際運動の段階に入つたといふ事、而もそれが所謂る政治的色彩を微塵も帶びぬ純宗教的運動の段階に留まつて居たといふ事である。

然るにその後間もなく、一四九四年に勃發したフランス王シャール八世のイタリア侵入は、『ヨーロッパの面貌を改め(6)』しめ、サヴォナローラをして政治史上の人物たらしめた(7)この大事件は、正にサヴォナローラ運動の一轉機といふ意味に於いて決定的な重要性を持つて居た。これは最早や從來彼の運動について見られて來た如き純粹な宗教運動ではなく、彼が極力忌避して來た現實的な政治事件への介入を意味するものであつた(8)。

抑々シャール南下の主要な目標の一つは、ナポリの獲得にあつた。然るにナポリと同盟しシャールに對抗せんと計つたピエロの輕擧は、フィレンツェの歷史的傳統であつた親佛關係(9)を全然無視するものであつた。事後にこの事を悟つたピエロは、ピエトラ・サンタのシャールが陣營に自ら赴き、そのフィレンツェに對する全要求を容れ、二十萬ドゥ

カーテンの巨費の支拂ひと、サルツァーナ、サルツァネッロ、リブラファッタ、リボルノ港、及びピサの牙城等の明渡しを諾した(10)。かゝる卑屈なる屈服の報知は、フィレンツェ市民を驚倒せしめ、遂に革命へと駛らしめるに至つた(11)。ピエロ・カッポニの『今こそ此の赤子の支配を終らしむべき時である』との宣言が、ピエロ・デ・メディチの失脚に必要にして充分な唯一の武器であつたとも言はれる(12)。

かくて復活せるフィレンツェ共和國は、シャールとの交渉の爲めに五名の使節を派遣したが、カッポニの提議により滿場一致、サヴォナローラも亦その中に加へられた(13)。これは直接には、彼がかねてよりシャールの入來を豫言し、懲罰をもたらす神の使なりと主張して居た事(14)が、シャールの對サヴォナローラ好感情をかもし出して居たといふ事情に因るものと考へられるのであるが、より根本的には、當時のフィレンツェ市民の誰れもが抱いて居たサヴォナローラに對する深い傾倒の念に因るものであつた。

而も何らの具體的な協定もが成立せざる一四九四年一一月一七日、早くもシャールはフィレンツェ市に第一歩を印し、市民は歡呼を以て之れを迎へたのであつたが、フィレンツェ市に對して彼の爲した法外な額にのぼる軍資金の要求、更に又彼の抱くピエロ召還復位の意圖、ピサのフィレンツェよりの離叛に對する承認(15)等々の意外な事態の發生は、フィレンツェ市民の對フランス感情を一變せしめ、兩者の間に險惡な空氣が漂ひ始めた。王のフィレンツェ撤退を促がすサヴォナローラの勸告は熱烈を極め、シニョーリアの態度も亦極度に硬化し、要求の承認を迫るシャールの脅迫に對して、カッポニが『然らば我等は我等の鐘を打たん』なる一句を報ひたのはこの時の事であつた。而も一一月二八日になつて漸く、四圍の情況の不利を知つたシャールは、フィレンツェを立ち去つたのであつた。

然らば、右の期間に於いてフィレンツェ内部の狀態は如何であつたらうか。過去六十年に亘るメディチ家への屈服は、一時フィレンツェ市民をして自治の術を失はしめたかの如き觀を呈した。そして又内憂外患の共に到つた當時に於いて、フィレンツェ市民の待望したのは、その形態の如何を問はず、何よりも先づ力强き指導者の出現であつた。そし

てかゝる者として、フィレンツェ市民のすべてが推し立てたのが、かつては純粋なリホーマーであり、今はシャールの魔手から祖國フィレンツェを救つた愛國僧サヴォナローラであつた。かくてサヴォナローラの好むと好まざるとに拘らず、四圍の情勢は彼をして、彼の從來忌避しつゞけて來た政治界への介入を餘儀なからしむるに至つた。それの當然の結果としてそれ以後に見られる彼の活動は、主として新政府の實質上の指導者、その法典の制定者として、次第に政治的色彩を濃化して行つた。

シャールの侵入、ピエロの退位を一轉機として、今やサヴォナローラ運動の第三段階、政治界への介入の時期が始まつた。そしてそれはやがて、悲慘な彼の政治的失脚に至るコースともなつた。宗教的リホーマーから政治的リホーマーへの前進、彼の失脚の究極的な原因は結局そこ迄遡つて論ぜられなければならないであらう。上來我々が、彼の失脚論の序説としてその純粋な宗教的リホーマーとしての活動の時期、就中かゝる意味に於ける彼とメディチ家との關係の經過を見て來たのも正にこの意味に於いてであつた。

註 (1) 例へば Schnitzer の外 E. Armstrong, Cambridge. I. 152; Robert Saitschick, Menschen u. Kunst der italienischen Renaissance. 1903. S. 286.

(2) Vgl. Schnitzer, I. S. 118 ff.; Creighton, op. cit., pp. 183–5. 尙ほロレンツォ、ピエロ兩者の性格及び政治の相違に就いてアームストロングは"the mild and amiable despotism of Lorenzo, the overt tyranny of his son"と要約して述べて居る。(Cambridge, pp. 147-8)

(3) Vgl. Schnitzer, I. S. 120 ff.

(4) Ränner., II. S. 10–1.

(5) Ralph Roeder, The Man of the Renaissance. p. 39; E. Armstrong, Cambridge. p. 178.

(6) See, P. Villari, Life and Times of Savonarola. p. 198.

(7) E. Armstrong, Cambridge. p. 144.

(8) シャールのイタリア侵入、その他その動機等に就き、詳しくは Schnitzer, I. S. 144 ff; Ralph Roeder, op. cit.,

p. 42.

(9) Vgl. Schnitzer, I. S. 153., S. 158, 165 ff.

(10) Ebenda, S. 166.

(11) 時人はこの革命の原因を專らピエロの暗愚にありと考へた。Ebenda, S. 159.

(12) Linda Mary Villari, Savonarola (Encyclopaedia Britannica). 尙ほこのピエロの失脚に、サヴォナローラが何ら直接の關係を持たなかつた事に就いては、Schnitzer. I. S. 159 ff.

(13) 當時サヴォナローラの名聲は愈々高く、殆んどすべての市民が彼の言動に期待をかけて居り、ローマすらも彼の助言を求めたと傳へられる。Ebenda. S. 168.

(14) Ebenda. S. 168–70.

(15) Ebenda, S. 190–1.